

ヘルン文庫の和漢書

——蔵書傾向と書き込み調査——

今村郁夫

はじめに

富山大学附属中央図書館には小泉八雲の旧蔵書であるヘルン文庫が収められている。ヘルン文庫には洋書二〇七一冊、和漢書三六四冊、合わせて二四三五冊所蔵されている。「富大比較文学」第一集でも述べたように、これまでヘルン文庫は主に洋書の研究が先行し、和漢書についてはあまり研究されてこなかった。そこで、私は和漢書の蔵書傾向と和漢書への書き込みの調査を行った。本論文ではその報告を行いたい。

一 蔵書傾向

ヘルン文庫の和漢書は全部で三六四冊あるが、タイトル数で数えると一〇七タイトルとなる。本章では、八雲が所蔵していたこれらの和漢書の傾向を探り、八雲の日本への興味・関心を見ていく手がかりとしたい。

蔵書の傾向を見るために、まずは蔵書を日本十進分類にしたがっ

て分類してみたい。富山大学附属図書館編『富山大学附属図書館所蔵 ラフカディオ・ハーン（ヘルン）（小泉八雲）文庫目録 改訂版』^三には分類目録も付されており、日本十進分類による分類がされている。しかしながら、その分類目録では全ての蔵書が分類されているわけではなく、本論文で対象としている和漢書も例外ではなかった。そのため、分類されていないものに関しては、国立情報学研究所の「Webcat Plus」^四や『国書総目録』^五等を利用して調べた。

この結果、和漢書の全一〇七タイトルは図1のように分類できることがわかった。まず、日本小説が最も多い六三タイトル、次いで仏教が一タイトル、神道が六タイトル、中国文学が四タイトルと続く。伝記、日本戯曲、日本詩はそれぞれ三タイトルであり、日本史と百科事典はそれぞれ二タイトルである。他に、イギリス・エッセイ、音楽、音楽・日本詩^六、書誌、心理学、伝説、動物学、日本画、日本語、日本地誌・紀行がそれぞれ一タイトルである。

このように、日本小説が圧倒的に多い。この日本小説の中には、八雲の作品の原典となったものも多く、このことからこの結果は妥当と言える。また、仏教や神道に分類されるものが合わせて一七タ

イトルあることを考えると、八雲は日本の宗教に関心があつたことが、蔵書からもうかがえる。これらに次ぐ中国文学は、『通俗三國志』、『呉越軍談 漢楚軍談』、『水滸傳』、『夷堅志』の四タイトルあるが、これは来日前の一八八七年に『中国怪談集』を書いており、以前から中国に興味があつたことが理由と考えられる。つづいて、伝記、日本戯曲、日本詩がそれぞれ三タイトルある。伝記は『近世畸人伝』、『続近世畸人伝』、『日本百将伝一夕話』、日本戯曲は『近松時代浄瑠璃』、『近松世話浄瑠璃』、『浄瑠璃名作集』、日本詩は『日本歌謡類聚』、『俗曲大全』、『狂歌百物語』である。この中で、日本戯曲に関しては、晩年に西洋の読者に日本の劇を紹介するために坪内逍遙に教えてほしいと言っており、逍遙はそれに応えて近松門左衛門の研究書を送るなどしている。八雲が日本の戯曲に関心があつたことがわかる。

次に、どの時代に成立したものが多いかを調べた。『国書総目録』等を参考にし、時代区分は、平安、鎌倉、室町、江戸前期（貞享まで、一六〇三～一六八八年）、江戸中期（元禄から安永まで、一六八八～一七八一年）、江戸後期（天明以降、一七八一～一八六七年）、明治とした。江戸時代のいづろかははっきりしないものは江戸とした。その結果、図2のように平安が二タイトル、鎌倉が六タイトル、室町が二タイトル、江戸前期が五タイトル、江戸中期が二八タイトル、江戸後期が三九タイトル、江戸が三タイトル、明治が一四タイトル、不明が八タイトルとなった。

このように、江戸期のものが計七五タイトルと全体の約七割を占めている。江戸期は「町人文学が極盛の域に達し」ており、結果論になつてしまふが、八雲は貴族的なものや武家的なものよりも自分

に近いものの文学に興味があつたと言える。

さて、日本十進分類で六三タイトルと圧倒的に多かった日本小説について、『ブリタニカ国際大百科事典』一〇や『国書総目録』等を参考に、より細かく分類した。分類としては、随筆、説話、仮名草子、浮世草子、読本、滑稽本、実録、明治期の小説、全集などとした。その結果、図3のように読本が一八タイトル、浮世草子と随筆がそれぞれ八タイトル、説話が七タイトル、滑稽本が四タイトル、実録と明治期の小説がそれぞれ三タイトル、仮名草子と全集がそれぞれ二タイトル、その他が八タイトルとなった。その他の内訳は、軍記物語、考証、雑記、浄瑠璃、神祇、地誌、人情本、室町物語である。

このように、読本が一八タイトルと全体の四分の一以上を占めている。読本には百物語風の怪異譚も多く、二、八雲の怪談好きが蔵書からもうかがわれる。八雲の怪談好きは妻のセツも『思い出の記』で、「怪談は大層好きでありまして、『怪談の書物は私の宝です』と言っていました」二と書いていることからわかる。また、浮世草子と随筆が合わせて一六タイトルと全体の約四分の一を占めている。『西鶴全集』などの浮世草子も『骨董集』や『世事百談』などの随筆も日本の風俗などについて書かれているものが多く、日本の風俗や習慣にも関心があつたことが蔵書からうかがわれる¹¹⁾。

こゝまで、ヘルン文庫の和漢書について分類作業を通して蔵書の傾向を見てきた。その結果、ジャンルでは日本小説が圧倒的に多く、成立時代では江戸期が最も多く、特に江戸中期以降が多いことが明らかになった。また、日本小説をさらに分類してみると、読本に分類されるものが四分の一以上を占めていた。このように、和漢書全

体を分類してみると、ある程度の蔵書傾向が浮かび上がってきた。しかし、ここからは八雲の作品との関連は少ししか見えてこない。そこで、次は八雲の作品の原典となったものに限って、同様の作業を試みていきたい。

八雲が再話した作品の原典となったタイトルはヘルン文庫に全部で一七タイトルある。これらをまずは日本十進分類によつて分類してみた。その原典タイトル数と再話作品数の関係を表したのが表1である^{一四}。表1のように、日本小説は原典タイトル数が一五で再話作品数が二八、日本詩は原典タイトル数が一で再話作品数も一、神道は原典タイトル数が一で再話作品数が三となった。

このように、日本小説を原典とした作品が圧倒的に多いが、これは再話して小説を書いている以上、当然の結果だと考えられる。

次に、時代別に分類してみた。その結果、図4のように原典タイトル数は平安が一、鎌倉が三、江戸中期が四、江戸後期が六、明治が三となり、再話作品数は平安が二、鎌倉が四、江戸中期が九、江戸後期が八、明治が九となった。また、図5のように全タイトルに占める原典タイトルの割合は平安と鎌倉がそれぞれ五〇パーセント、江戸中期が一四パーセント、江戸後期が一五パーセント、明治が二一パーセントとなり、原典一タイトル当たりの再話作品数は平安が二、鎌倉が一・三三、江戸中期が二・二五、江戸後期が一・三三、明治が三となった。

この結果から、原典としたものは江戸中期以降のものが多いことがわかる。また、明治や江戸中期、平安のものは原典一タイトルから二作品以上の再話が行われていることもわかる。特に明治は原典一タイトルから平均して三作品の再話が行われており、突出してい

る。八雲がそれだけ明治の作品に共感したことの表れと言える。明治は八雲が生きている時代のため、感覚が近かったことが要因だと考えられるのではないだろうか。

つづいて、種類別に分類した結果を見てみる。図6のように原典タイトル数は説話が五、読本が四、明治期の小説と浮世草子が二、滑稽本、人情本、日本詩、神道がそれぞれ一となり、再話作品数は説話が九、読本が八、明治期の小説が六、浮世草子が三、滑稽本、人情本、日本詩がそれぞれ一、神道が三となった。また、図7のように全タイトルに占める原典タイトルの割合は説話が七一パーセント、読本が二二パーセント、明治期の小説が六七パーセント、浮世草子と滑稽本が二五パーセント、人情本が一〇パーセント、日本詩が三三パーセント、神道が一七パーセントとなり、原典一タイトル当たりの再話作品数は説話が一・八、読本が二、明治期の小説が三、浮世草子が一・五、滑稽本、人情本、日本詩がそれぞれ一、神道が三となった。

この結果を見ると、説話は読本より全体のタイトル数が少ない^{一五}にもかかわらず、原典タイトル数および再話作品数は多いことがわかった。怪異譚が多いとされる読本より説話が多いことは意外な結果とも思えるが、説話にも奇談がないわけではない。説話の方が八雲にとつて共感できる話が多かったという事実がここからわかる。また、読本は原典一タイトルから平均して二作品が再話されていることから、多くの部分を読んでいた(妻のセツに読んでもらっていた)と言えるのではないだろうか。

最後に、八雲の著書別に見てみたい。表2のように「霊の日本」(一八九九)では、全一四作品中三作品が再話作品であり再話作品

の割合は二一パーセントだった。同様に『影』(一九〇〇)では、全一六作品中六作品が再話作品であり再話作品の割合は三八パーセント、『日本雑録』(一九〇一)では、全一六作品中五作品が再話作品であり再話作品の割合は三二パーセント、『骨董』(一九〇二)では、全二〇作品中五作品が再話作品であり再話作品の割合は二五パーセント、『怪談』(一九〇四)では、全二〇作品中一〇作品が再話作品であり再話作品の割合は五〇パーセント、『天の河綺譚その他』(一九〇五)では、全七作品中三作品が再話作品であり再話作品の割合は四三パーセントだった。一方、著書別に原典タイトル時代の別分類を行った結果が図8である。図8のように『霊の日本』では鎌倉が一、明治が二となり、『影』では平安が二、鎌倉が一、江戸後期が三となった。以下、『日本雑録』では江戸後期が二、明治が三、『骨董』では鎌倉が一、江戸中期が四、『怪談』では鎌倉が一、江戸中期が二、江戸後期が三、明治が四、『天の河綺譚その他』では江戸中期が二、江戸後期が一となった。さらに、種類別に分類すると、図9のように『霊の日本』では説話が二、『影』では説話が三、読本が二、人情本が一、『日本雑録』では読本が二、明治期の小説が一、神道が二、『骨董』では説話が四、浮世草子が一、『怪談』では説話が二、読本が一、明治期の小説が三、浮世草子が二、滑稽本が一、神道が一、『天の河綺譚その他』では読本が二、日本詩が二となった。

このように、コンスタントに再話作品を書いているが、『怪談』では半数が再話作品であり、突出している。ほかは時代別に見ても種類別に見ても大きな特徴は見られないが、『骨董』に関しては時代別では江戸中期のものが、種類別では説話を再話した作品が多いよう

である。全体的にあまり大きな特徴は見られないが、『怪談』は再話作品数も多く、時代も種類も幅広く、八雲の集大成的作品だということだが、これらのことからうかがわれる。

ここまで、ヘルン文庫の調査をもとに八雲の和漢書の蔵書傾向を見てきた。まとめると、和漢書全体を見ると日本小説が圧倒的に多い。成立時代では江戸中期以降のものが多く、種類別では読本が多い。また、原典タイトルを見ると、成立時代では和漢書全体と同様に江戸中期以降のものが多く、原典タイトルになっている割合では平安と鎌倉が多いようである。種類別では読本が多いのは和漢書全体と同様だが、説話が最も多くなっているのが特徴的である。しかし、原典一タイトル当たりの再話作品数では明治期の小説が多い。一方、八雲の著書別にも見てみたが、大きな特徴は見られなかった。これらのことから、八雲は日本小説で江戸中期以降に成立した読本を最も多く所蔵していると言える。さらに、八雲にとって再話に適していたのは明治期のもの、あるいは説話や読本であったと言えるだろう。

二 書き込み調査

私は「富大比較文学」第一集でヘルン文庫の和漢書における書き込みについて一部を報告した。本章では、その後の調査結果を全て報告する。方法は、「富山大学学術情報リポジトリ」にも、マイクログラフフィルムおよび現物を見て調査した。この調査により、ヘルン文庫の和漢書における書き込みについては、全て調査したことになる。さて調査結果「ハ」を記していくが、全ての調査を終えて、書き込み

があつたのは一部で大半の蔵書には書き込みが見られないことが判明した。書き込みが見られなかつたものは次の通りである。

- 《眞書太閤記》(二〇七二〜二〇七五)、《源平盛衰記》(二〇七六)、
《南總里見八犬傳》(二〇七七〜二〇七八)、《東海道中・岐蘇道中・
奥羽道中・膝栗毛》(二〇七九)、《通俗三國志》(二〇八〇〜二〇八一)、
《柳澤・越後・黒田・加賀・伊達騒動實記》(二〇八二)、《呉越
軍談 漢楚軍談》(二〇八三)、《西鶴全集》(二〇八四〜二〇八五)、
《滑稽名作集》(二〇八六〜二〇八七)、《其磧自笑傑作集》(二〇八
八〜二〇八九)、《人情本傑作集》(二〇九〇〜二〇九一)、《珍本全集》
(二〇九二〜二〇九四)、《四大奇書》(二〇九六〜二〇九七)、《近松
時代浄瑠璃》(二〇九八)、《近松世話浄瑠璃》(二〇九九)、《浄瑠璃
名作集》(二一〇〇)、《大岡政談》(二一〇一)、《仏教各宗高僧実伝》
(二一〇二)、《仇討小説集》(二一〇三)、《馬琴傑作集》(二一〇四)、
《俠客伝全集》(二一〇五)、《日本歌謡類聚》(二一〇六〜二一〇七)、
《落語全集》(二一〇八)、《俗曲大全》(二一〇九)、《十訓抄》(二一
一〇〜二一一四)、《古今著聞集》(二一一七〜二二三二)、《骨董集》
(二二三三〜二二三五)、《用捨箱》(二二三六〜二二三七)、《夷堅志
和解》(二二三八〜二二四五)、《繪本寫實袋》(二二五四〜二二六三)、
《玉すだれ》(二二六四〜二二六九)、《新著聞集》(二二七〇〜二二
七七)、《想山著聞奇集》(二二八三〜二二八七)、《長崎夜話草》(二
一八九〜二一九三)、《北越雪譜》(二一九四〜二二〇〇)、《北越奇談》
(二二〇一〜二二〇六)、《奇談北國巡杖記》(二二〇七〜二二一一)、
《近世異説奇聞》(二二一一〜二二一六)、《今古奇談翁草》(二二一
七〜二二二二)、《古今奇談繁野話》(二二二二〜二二二七)、《小夜嵐
物語》(二二二八〜二二三七)、《遠山奇談》(二二三八〜二二四一)、

- 《遠山奇談 後編》(二二四二〜二二四五)、《木耳雜記》(二二五
一〜二二六〇)、《宿直草》(二二六一)、《世事百談》(二二六一〜二二
六五)、《諸国怪談実記》(二二六六)、《怪談諸国物語》(二二六七)、
《化競丑満鐘》(二二六八〜二二七〇)、《新累解脱物語》(二二七一
〜二二七五)、《富士の穴物語》(二二七六〜二二七七)、《御伽厚化
粧》(二二七八)、《列仙全伝》(二二九九〜二三三三)、《近世崎人伝》
(二三三三〜二三三九)、《続近世崎人伝》(二三三九〜二三四三)、
《巖流敵討絵本二島英雄記》(二三三六〜二三四〇)、《朝鮮人大行列
記》(二三四一)、《琉球人大行列記》(二三四二)、《新沙石集》(二三
五三〜二三五七)、《各宗必携仏学三書》(二三七四〜二三七七)、《往
生要集》(二三七八〜三三八〇)、《盆供施餓鬼問弁》(三三八七)、《親
鸞上人御一代記図絵》(三三九〇)、《善悪因果経和談図会》(三三九
一〜三三九六)、《金比羅參詣名所図会》(三三九七〜二四〇二)、《大
道問答》(二四〇三)、《神語》(二四〇四)、《神風記》(二四〇五)、
《出雲大社宮治革図弁》(二四〇六)、《梅花心易掌中指南》(二四〇
七〜二四〇九)、《歌舞音楽略史》(二四一一〜二四一三)、《声曲類纂》
(二四一四〜二四一九)、《万物紀元古事大全》(二四二〇〜二四二二)、
《日本大玉篇》(二四二二〜二四二四)、《群書一覽》(二四二五〜二
四三〇)、《郡名異同一覽》(二四三四)、《浮世絵展覧会目録》(二四
三五)。

以上が、調べても書き込みが見られなかつたものである。次に、
書き込みや付箋等が見られたものを挙げ、その内容を報告する。た
だし、書き込みについては八雲によるものでないと思われるものが
ほとんどだが、本論文では見られた書き込みをできる限り報告する
方針である。そのため、八雲によるものかどうかは、本論文では言

及しないこととする。

《水滸傳》(二〇九五)の五八三ページに鉛筆で落書きのようなものが見られた。

《昔物語 上十》(二一〇〇～二一一一)の上の二一ページの「〇人妻成惡靈除其害陰陽師語」と一五〇ページの「近江國女生靈來京害人語」の上に付箋が貼られていた。

《宇治拾遺物語抄 上巻下巻》(二二一五～二二一六)には多くの鉛筆による書き込みが見られた。上巻の八〇ページの「おどろき」の右隣に「目のさめる」、八二ページの題名「(廿五) 検非違使忠明の事」の下に「監視」、 「御堂さま」の「さま」の右隣に「方へ」との書き込みが見られた。「御堂の東のつま」の「つま」の右隣にも書き込みが見られるが、判読できなかった。「しとみのもとを」の「と」の右隣に「戸」、「しづかれて」の右隣に「ふう」、左隣に「ふわ〜」と「との書き込みが見られた。八三ページの「やをら」の右隣にも書き込みが見られるが、判読できなかった。「たちなみて」の「なみて」の右隣に「ならびて」、題名「(廿六) 小野宮大饗の事」の下に「小野、原」、 「付西宮殿富小路大臣等大饗の事」の下に「高、富、小路、実補」、「九条殿」の「九」の右隣に「第」、「細長」の右隣に「衣の名」、「心なかりける」の右隣に「ききなど」、「御まへ」の右隣に「女中」、「やり水」の右隣に「流水」、「つゆ」の右隣に「少しも」、八四ページの「尊者におはせよ」の右隣に「尊者とは、二の代役」、「庭の挿えずまじければ」の右隣に「尊者は、故也」との書き込みが見られた。八五ページの「あやしくて」の右隣にも書き込みが見られるが、判読できなかった。「わりなく」の右隣に「そぞろしく」、下の余白に「おはら」、「八つ

八四」、「八六」ページの「かしがましき」の右隣に「や

かまし」、奥付の下の余白に「Hallow」との書き込みが見られた。下巻の一ページの「(一) 獵師、佛を射る事」という題名の頭に「×」、「おこなふ聖」の右隣に「務 行をしている僧」、「年比行ひて」の

右隣に「年久しく」、「坊」という文字の右隣に「寺」、「餌袋」という言葉の上の余白に「餌袋」之鷹 餌ヲ入レテ持歩ルヲ轉テ食物ヲ入レテ持歩ク袋、「經をたもち奉りて」の「たもち」の右隣に「読」、「菩薩」という言葉の右隣に「ぼさち」、「よに、たふとき事」

の「よに」の右隣に「甚」、二ページの「やう〜」という言葉の右隣に「漸々」、「いかゞは」の「い」の右隣に「ア」、「ゞ」の右隣に「論」、「をい〜」の右隣に「あ〜〜」、三ページの「火をうちけつごとくにて」の「けつごとく」の右隣に「すと同じ」、七ページの題名「(三) 伴大納言應天門をやく事」の上に「×」、「應天門」の右隣に「御ノ正門」、「大やけに申し」の右隣に「朝へ申し」、 「移しの馬にのり給ひて」の右隣に「畧式鞍ヲケル馬ヲ移し馬と云フ」、「北の陣」の右隣に「奥也」、「大事になさせ」の右隣に「大げさにゐるは」、「いとことやう」の右隣に「甚だ怪しからん」、下の余白に「信は漁信也」、八ページの「一定」の右隣に「日」、「日の装束して」の右隣に「殿」、「頭中将」の右隣に「人の頭」、「ひと家」の右隣に「一同」との書き込みが見られた。「ことに」の右隣にも書き込みが見られるが、判読できなかった。一〇ページの「きわめたる」の右隣に「所」、「いとほし」の右隣に「あわれ」、「とりさへん」の右隣に「仲」、一ページの「おれ」の右隣に「己レハ」、「とねりたつる」の「たつる」の右隣に「をいめていふ」、「ばかり」の右隣に「位」、 「おほやけ人」の右隣に「役人」、「しれ事」

の右隣に「馬^ニ」、「かたみかな」の右隣に「乞食のな」、「かうけ」の右隣に「高家」、「腹立ちさして」の「さして」の右隣に「を其ま」として」との書き込みが見られた。一二ページの「あらがひ」の右隣にも書き込みが見られるが、判読できなかった。「ありのくたり」の右隣に「あ^ニ」、題名の「(四) 吾婦人生贖を止むる事」の上に「X」、二三ページの「をかしげに」の右隣に「^ニしく」、「らうたげなる」の右隣に「^ニらしく」、「あやしき」の右隣に「不^ニ」、
「おろかにやは思ふ」の右隣に「おろ^ニは^ニは^ニは^ニら^ニ」、
「めでたければ」の右隣に「^ニれ」、「ねをのみ泣く」の右隣に「泣^ニ」、
「しかり」の右隣に「い^ニる」、一四ページの「むくつけき」の右隣に「^ニトスルヤウナ」、「かゝ事」の右隣に「^ニ」（かゝる事」とするべき所に、「^ニ」を付け加えたもの）、
「心にもあらず」の右隣に「^ニねの^ニて」、「一五ページの「ゆゝしかる」の右隣に「あ^ニろし^ニ」、
一六ページの「しなかく」の右隣に「上品」、「思ひかまふる」の右隣に「工夫」、「一七ページの「すむ」の右隣に「含^ニ」、
「いらなき」の右隣に「甚鋭き」との書き込みが見られた。一八ページの「のゝしり」の右隣に傍線が引いてあり、二〇ページの「綿を」の右隣にも書き込みが見られるが、判読できなかった。同じく「いらなく」の右隣にも書き込みが見られたが、判読できなかった。「よこ座」の右隣に「正^ニ」、との書き込みが見られ、「ひきはりて」の右隣に傍線が引いてあり、二一ページの「しや首」の右隣にも書き込みが見られるが、判読できなかった。「かひてん」の右隣に「食^ニん」、「あさましき」の右隣に「あきれ^ニ」、「そごぼく」の右隣に「^ニ」、
「さらば」の右隣に「^ニ去^ニ」、
「まどひ」の右隣に「迷^ニ」、
二二ページの「こりとも」の右隣に「^ニら^ニ」、
「領し」の右隣に「^ニ

の^ニし」、「二三ページの「わびしき」の右隣に「つらひ^ニ」を、「二四ページの題名「(五) あをつねの事」の上に「X」、「古き宮の御子」の右隣に「老イタル息子」、「細たか」の「たか」の右隣に「高」、「あてやか」の右隣に「上品」、「やうだい」の右隣に「客観」、「をかなりけり」の右隣に「馬^ニらしい」、「かたくなはしき」の右隣に「頑固のやう^ニ」、
「あぶみがしら」の右隣に「鎧の如き」との書き込みが見られた。「えいは」の右隣に傍線が引いてあり、「露草のはな」の右隣に「青色の^ニを嘆く草」、「まかぶら」の右隣に「目のうち」との書き込みが見られた。さらに、下の余白に「えい」の絵が描かれており、二五ページの「しめし餘りて」の右隣にも書き込みが見られるが、判読できなかった。「これを」の右隣に「^ニ太夫」、「びんなき」の右隣に「不^ニ含」との書き込みが見られた。「みこ」の右隣にも書き込みが見られたが、判読できなかった。「まめやかに」の右隣に「信実」、「さいなみ」の右隣に「責め」、「したなきをして」の右隣に「心の中で言困りて」、「かく」の右隣に「斯く」、「さいなめば」の右隣に「責む^ニ」、「起請す」の右隣に「神佛^ニを^ニふ」、「あふなく」の右隣に「何の気なし^ニ」、「うしろで」の「で」の右隣に「姿」、「まる」の右隣に「殿」、二四、二五ページの間の余白に「殿上ハ公卿ノ内ノ殿上人ト云フアリノ清涼殿ノ中ニ殿上ノ間ト云フ之ニ昇殿ヲ許サレシ人ヲ云フノ三位以上ハ上達部ト云ヒ四位ト五位ノ内ニテ昇殿^ニ許^ニセラレタルヲ殿上人ト云フノ五位以下ハ地スノ人ト云フ」との書き込みが見られた。

③三國事蹟除睡鈔 一八⑤（二一四六〜二一五三）の四ページの「○潜上自称王而所害事」の始まりの部分の上余白に青い付箋が貼られていた。以下同様に、六ページの「○一生不孝不順父意事」

の始まり、七ページの「〇二子共死父不憂悲事」の始まり、一〇ページの右上（〇知雄先生親殺食之事」の話の途中）、一七ページの「〇初発心入定思故二事」の始まりにも貼られていた。二の一ページの「〇后死王勅官人令哭事」の始まり、三ページの「聞長説法足痿落涙事」の始まり、六ページの「〇無言道場三人皆言事」の始まりにも同様に貼られていた。四の四ページの右上（〇畫師與工巧互相欺事」の話の途中）に赤い付箋が、一三ページの「〇欺妻祈神更亦飲酒事」の始まりに青い付箋が、一四ページの「〇禁酒見男女行云制事」の始まりに赤い付箋がそれぞれ貼られていた。五の目次の「〇臨終惜財云親死骸事」、「〇非理貪欲必有大損事」の上に、七ページの「〇非理貪欲必有大損事」の始まりに、一六ページの「〇愚人欲争・實食之事」の始まりにそれぞれ赤い付箋が貼られていた。

六の一四ページの「〇愛華之人不畏中有事」の始まりに赤い付箋が貼られていた。七の目次の「〇効得金鼠為毒蛇螫事」の上に赤い付箋が貼られていた。八の六ページの左上（〇新鬼築春佛家不畏事」の話の途中、次の「〇鬼畏亦小豆等食物事」に近い）に、一一ページの「〇妻狐生子被狗追去事」の始まりにそれぞれ青い付箋が貼られていた。

《猿著聞集 一五》（二一七八～二二八二）の一五の一ページの上部の余白が切り抜かれていた。

《相生玉手箱》（二二八八）の目次に以下のように点（・）があった。

- 第八、富士農廣〓
- 第九、茄子の理屈
- 第十、〓〓〓〓〓〓

第十一、浴室の辨舌 第十二、〓〓乃〓〓

《臥遊奇談 一・五》（二二四六～二二五〇）の巻一の挿絵の人物にひげなどが描かれていた。

《当日奇観 一・五》（二二七九～二二八三）の巻一の挿絵の人物にひげが描かれていた。巻二の挿絵の右下隅に墨で文字あるいはマークのようなものが描かれているが、はんこを塗りつぶしているようにも見える。巻三の最終ページにも同様のものがあつた。巻五の奥付の前に墨で文字が書かれている。おそらく五文字で、一部は「谷本」と読める。蔵書印にも「谷本」の文字が見えるので、所蔵者の署名の可能性もある。

《怪物与論 五冊》（二三〇一）の巻四のはじめの上余白に絵が描かれていた。最後にも同様の絵が描かれていた。蔵書印と同じようなものだと思う。

《夜窓鬼談 上巻・下巻》（二三〇七～二三〇八）の下巻の奥付に漢数字やカタカナの書き込みが見られた。「十二ノ十九ノ五六〇〇ノ入りシ／＼（斜線）タシ」と読める。

《日本百将伝一夕話 一・一二》（二二三四～二二三五）の二の見返しに筆記体で「To my dear Mr. L. Hearn from N. S.」とインクで書かれている。

《沙石集 一之巻・二之巻》（二三三三～二三三六）の二之巻の六、一六ページに付箋の跡が見える。付箋の付近にはそれぞれ「千章を誦せんよりハ。〓〓一句を…」「〓〓を〓〓めくれ〓〓」と書かれている。

《王心抄》（二三五八）の見返しに鉛筆で「俱舎／〓相／〓掄／〓

「華嚴」と書かれている。また、赤で校正した跡がある。

《正法念處經》(二三五九〜二三七二)の本文に赤で点(・)や傍線、「などが書かれている」九。

《諸陀羅尼》(二三七三)の目次と思われる部分の「㊦ 回向」の「回」の文字が「面」の下の部分のようになっていてのを赤で「回」に訂正してある。

《三歳因縁弁疑 前編上下 後編上下》(二三八一〜二三八六)の後編上の見返しに鉛筆で「諸君ハセレム得バス」と書かれている。一ページに墨で「ロロロムナレバロルルナカレ若シロルナレバロレヲ腹ハセヨ」と書かれている。七ページの「だんロロロ」を鉛筆で囲ってある。余白には、「㊦忍婆羅密」と書かれている。最終ページの前のページの余白に鉛筆で「ロソ一ノロロロ影ロロロ一大ロロロロ札ロロロ而シテ共ハハハ礼会ハハハロル二入ロリテハ必ラズヤロロロナカズベカラズ」と書かれており、最終ページの余白には「and」と書かれている。後編中の一五ページの余白に鉛筆で文字が九文字書かれている。うち二文字は「町」と「丁」と読めるが、残り八文字は判読できなかった。

《孝子善之丞感得伝》(二三八八〜二三八九)の挿絵に赤で書き込みがある。上の一八ページには「人中ヲロロロロ者ヲ責ハ、ロロ往生人育ロロ自ロロ往生人ヲ待ロロロロ待ハシ、一九ページには「要事ヲ見テロロロ者ヲロ、」此世ハ食物ヲ種々ニ要ロロ者ヲ、」善四ロロ、」善法ヲ誹謗シハ者墮ハ、四〇ページ代前半には「我子ノロロ金ロロ服ヲ子ヲアタエタロロモイ痴ロロ妻ヲロロ掠ロロロ墮ハ、」台ロロ水ロロ又難ル、」善之巫伯母ロロロ、」此世デ酒ヲ呑ム者墮ハ、」親不孝者墮、」此

世デ酒ヲ沽ル者墮ハ、四六ページには「存生中如是依世ニ生テ居ナカラ要ハ要ロロ、」善之巫ロロ、」此世デ殺生シタ者墮ハ、四七ページには「血池、」ロ人存生中ロ善ハ之ロ村ロロ」と書かれている。

《英雄論》(二四一一)の遊び紙に筆記体で「Respectfully presented Mr. Y. Koizumi by His pupil, R. Tsuchi」云々で書かれてある。

《通俗仏教百科全書 上巻下巻》(二四三一〜二四三三)の上巻の扉の左下に鉛筆で「128」、中巻と下巻の目次のはじめのページの左下に鉛筆でそれぞれ「129」、「130」と書いてある。

ここまで、書き込み等があったものとその内容を挙げた。《宇治拾遺物語》への書き込みが突出して多く、他は宗教书にやや書き込みが多いということが言える。ただし、前述したようにこれらの書き込みは大半が八雲によるものではないと思われる。しかしながら、八雲がセツにこれらの和漢書を読んでもらう際にセツが書き込んだものとも考えられる。一方、和漢書の大半が古本であることを考えると、以前の所有者による書き込みである可能性も高い。ただし、その書き込みを見てセツが八雲に読み聞かせたとも考えられ、軽く扱うことはできないと思われる。これらの書き込みが誰によるものを明らかにすることが今後の課題となる。少なくとも八雲の関係者かどうかを明らかにすることはとても重要になってくる。

おわりに

本論文では、ヘルン文庫の和漢書の蔵書傾向および書き込みの有無を調査したものを報告した。蔵書傾向は必ずしも所蔵者の興味・

関心を表しているとは言えないかもしれない。特に八雲の場合は、妻のセツが買ってきたという二〇〇ものがあり、直接八雲の興味・関心につながるものではないかもしれない。また、書き込みも古本の場合ほとんどが以前の所有者によるものだと思う。しかし、セツも八雲もそれらを参考にした可能性があり、深く分析すれば何らかの関係が見つかるだろう。

八雲は和漢書を原典として作品を書いたことがこれまでも指摘されている。八雲を研究する上で、「和漢書」は重要なキーワードになると思われる。本論文での調査はこれからの八雲研究の基礎となるものだと考えている。

一 二〇〇八・一一

二 上下などに分かれているものを一タイトル〇冊とカウントするため。例えば、『眞書太閤記』は巻一から巻四に分かれているため、一タイトル四冊とカウントしている。

三 富山大学附属図書館、一九九・三。以下、『ヘルン文庫目録』と略記。

四 『Webcat Plus』(ホームの URL: <http://webcatplus.ni.ac.jp/>) (二〇一〇年三月七日確認)

五 岩波書店、一九六三・一一〜一九七〇・九、補訂版は一九八九・九(一九九〇・一一)

六 『ヘルン文庫目録』で、二つにわたって分類されていた。

七 八雲の仏教に関する作品としては、『日本の民謡に現れたる仏教引論』(『仏の畑の落穂』)、「仏教に関する日本の諺」(『盞の日本』)、「仏教に縁のある動植物の名」(『日本雑録』)などがある。また神道に関しては、大東俊一氏も「ハーンと仏教」(『ラブカディオ・ハーン』の思

想と文学」彩流社、二〇〇四・九)で指摘しているが、『日本——一つの試論』の多くの章で神道を取り上げている。

八 関田かおる「坪内逍遙と小泉八雲——新資料からみて」(『國文學解釈と教材の研究』四三巻八号、一九九八・七)によると、ヘルン文庫所蔵のこれら三冊は、逍遙が寄贈したものではないらしい。逍遙が寄贈したのは、『饗庭篁村校訂近松瑠璃三種』、『日本演劇史』、『近松之研究』などという。

九 『広辞苑 第六版』(岩波書店、二〇〇八)

一〇 ブリタニカ、二〇〇七

一一 『近世文学研究事典』(桜楓社、一九八六・四)

一二 引用は、田部隆次『小泉八雲(第四版)』(北星堂書店、一九八〇・一)による。

一三 八雲の日本の風俗や習慣についての作品としては、「二つの珍しい祝日」(『知られざる日本の面影』)、「赤き結婚」(『東の国から』)、「門つけ」(『心』)、「人形の墓」(『仏の畑の落穂』)、「日本の女の名」(『影』)などがある。

一四 本論文でいう原典タイトル数は、八雲作品の原典となった本のタイトル数を示し、再話作品数は八雲が再話した作品数を示す。例えば、神道は原典タイトル数が一で再話作品数が三となるが、これは『通俗仏教百科全書』という一タイトルの本から八雲が「梅津忠兵衛」、「食人鬼」、「閻魔の庁で」という三作品を再話したことを意味している。また、これ以降の図表でいう原典タイトル率とは、全タイトルに占める原典タイトルの割合である。

一五 図3 参照。

一六 一部重複するものもあるが、それについてはより詳しく報告する。

一七 ヘルン文庫所蔵の和漢書の一部を見ることができる。(ホームの URL: <http://utomin.hib.n.toyama.ac.jp/dspace/>) (二〇一〇年三月八日確認)

一八 タイトル名は一部省略したものがある。カッコ内は書架番号。また、判読が難しいものもあるが、できるだけ判読して報告する。しかし、

判読できなかったもの、判読結果が間違っているものもあると思われるが、ご容赦願いたい。なお、判読できなかった部分は「II」で表した。また、「富大比較文学」第一集で報告したものを含めた全調査結果を表3の書き込み調査表にまとめた。

一九全一を挙げるとあまりに多いのでこれだけにとどめた。しかし、「蚕」『靈の日本』と「餓鬼」『骨董』で『正法念處経』が言及されていたため、全てを報告すべきであった。ご容赦願いたい。

二〇『思い出の記』に「私は古本屋をそれからそれへと大分探しました」と書かれている。

付記 書き込み調査等にご協力くださった方々、特にヘルン文庫の資料の利用にご協力くださった富山大学附属中央図書館の職員の方々に感謝申し上げます。

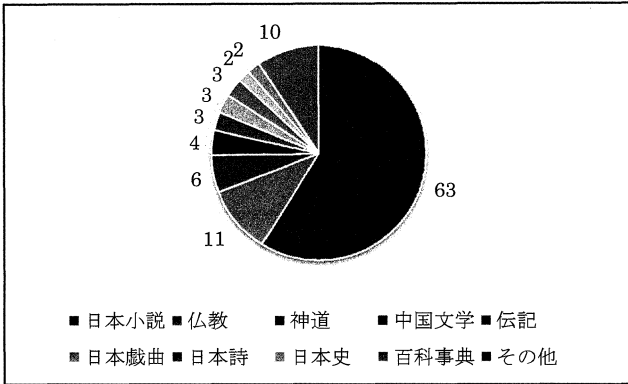


図 1 日本十進分類による分類

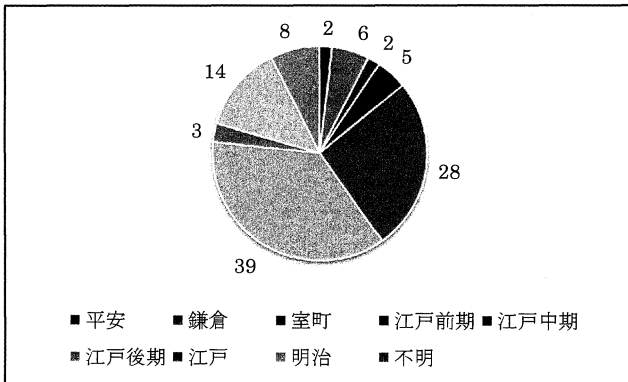


図 2 時代別分類

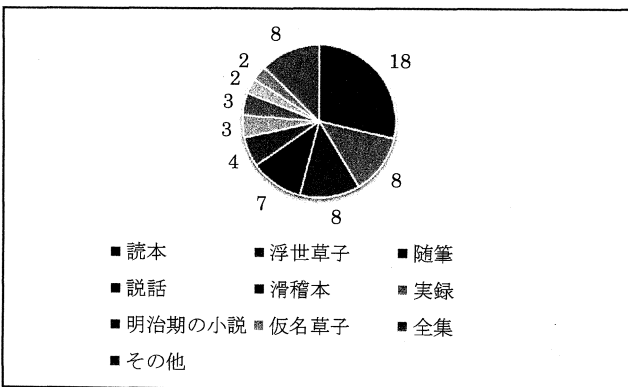


図 3 種類別分類

表 1 原典タイトルの日本十進分類による分類

分類	原典タイトル数	再話作品数
日本小説	15	28
日本詩	1	1
神道	1	3

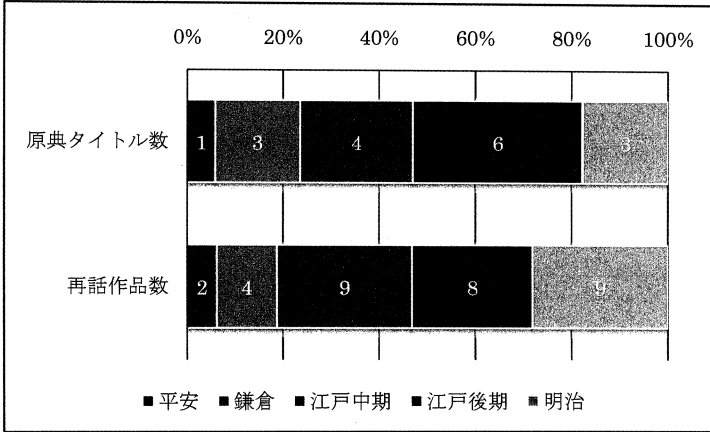


図 4 原典タイトルの時代別分類

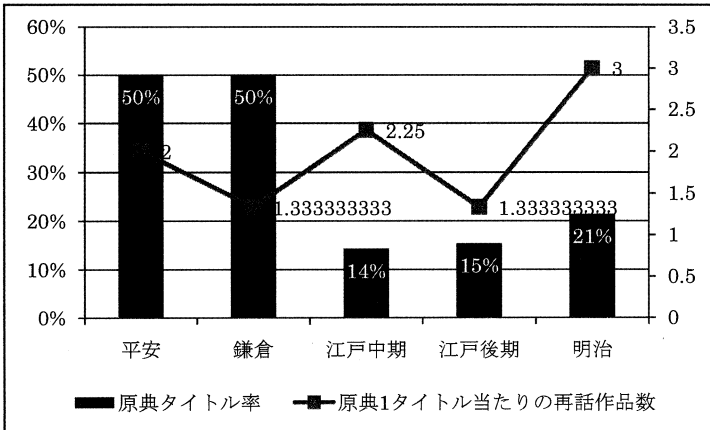


図 5 原典タイトルと再話作品数の関係 (時代別)

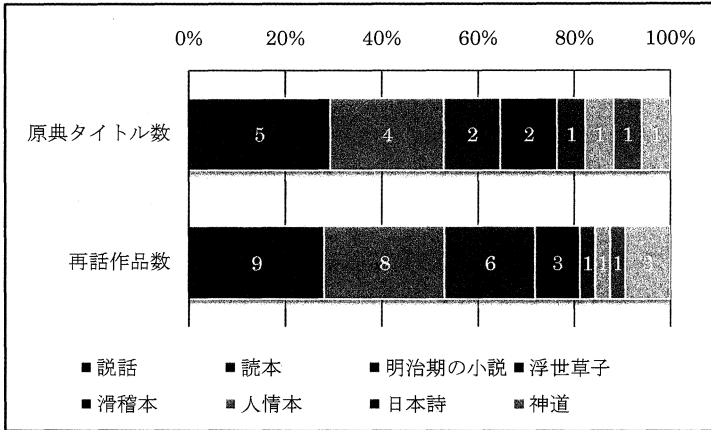


図 6 原典タイトルの種類別分類

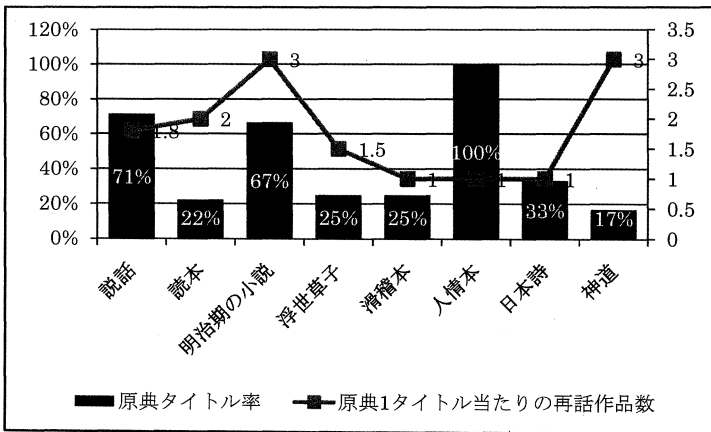


図 7 原典タイトルと再話作品数の関係 (種類別)

表 2 著書別の再話作品数

	再話作品数	作品数	再話作品の割合
霊の日本 (1899)	3	14	21%
影 (1900)	6	16	38%
日本雑録 (1901)	5	16	31%
骨董 (1902)	5	20	25%
怪談 (1904)	10	20	50%
天の河綺譚その他 (1905)	3	7	43%

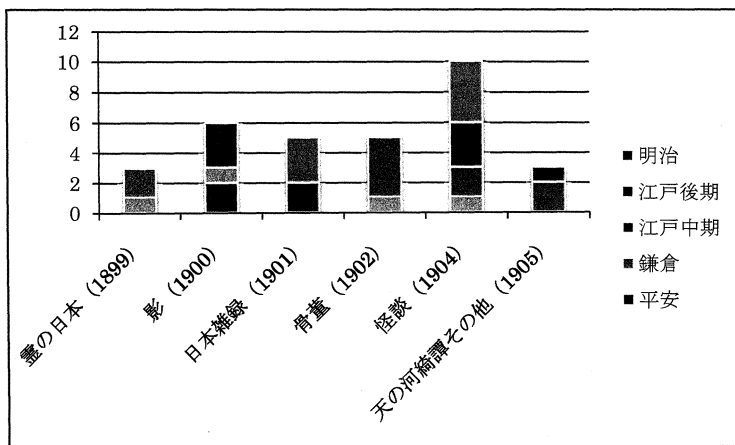


図 8 原典タイトルの時代別分類 (著書別)

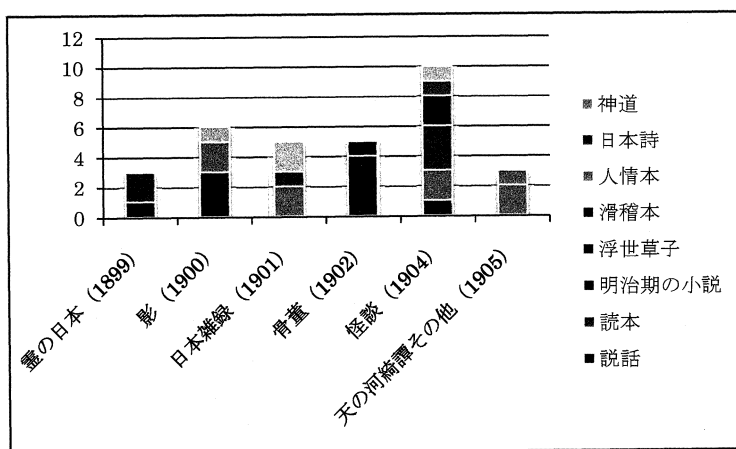


図 9 原典タイトルの種類別分類 (著書別)

表 3 書き込み調査表

書架番号	書名	書き込み内容
2072-2075	眞書太閤記 卷1-卷4 校訂版	
2076	源平盛衰記 全	
2077-2078	南總里見八犬傳 中巻・下巻	
2079	東海道中・岐蘇道中・奥羽道中・膝栗毛 全	
2080-2081	通俗三國志 上巻・下巻	
2082	柳澤・越後・黒田・加賀・伊達騒動實記 全	
2083	呉越軍談；漢楚軍談	
2084-2085	西鶴全集 上巻・下巻	
2086-2087	滑稽名作集 上巻・下巻	
2088-2089	其磧自笑傑作集 上巻・下巻	
2090-2091	人情本傑作集 上巻・下巻	
2092-2094	珍本全集 上巻・下巻	
2095	水滸傳 下巻	583ページに鉛筆で落書きのようなものあり。
2096-2097	四大奇書 上巻・下巻	
2098	近松時代浄瑠璃	
2099	近松世話浄瑠璃	
2100	浄瑠璃名作集	
2101	大岡政談	
2102	仏教各宗高僧実伝	
2103	仇討小説集	
2104	馬琴傑作集	
2105	俠客伝全集	
2106-2107	日本歌謡類聚 上巻・下巻	
2108	落語全集	
2109	俗曲大全	
2110-2111	今昔物語 上・下	上の 21 (○人妻成悪靈除其害陰陽師語)、150 (○近江国女生霊来京害人語) ページに付箋あり (題名は新漢字に直した)。
2112-2114	十訓抄 上、中、下 写本	
2115-2116	宇治拾遺物語抄 上巻・下巻	上巻の 80、82～85 ページに書き込みあり。語句の意味など。裏表紙にサインあり (八雲ではない)。下巻の 1～3、7、8、10～18、20～25 ページに書き込みあり。
2117-2131	古今著聞集 1-15	
2132-2135	骨董集 卷之1-卷之4	
2136-2137	用捨箱 上・中	
2138-2145	夷堅志 和解 1-8	

2146-2153	三國事蹟除睡鈔 1-8	以下の所に付箋あり。 1の4、6、7、17ページ。 2の1、3、6ページ。 4の4、13、14ページ。 5の目次、7、16ページ。 6の14ページ。 7の目次。 8の6、11ページ。
2154-2163	繪本寫實袋 1-9 (上・下) 再板	
2164-2169	玉すだれ 1-6	
2170-2177	新著聞集 1-8	
2178-2182	猿著聞集 1-5	1~5の1ページの上部の余白が切り抜かれている。
2183-2187	想山著聞奇集 1-5	
2188	相生玉手箱 1-5	目次の第8~12の上部に点(・)あり。
2189-2193	長崎夜話草 1-5	
2194-2200	北越雪譜 初編上、中、下 二編春・冬	
2201-2206	北越奇談 1-6	
2207-2211	奇談北國巡杖記 1-5	
2212-2216	近世異説奇聞 1-5	
2217-2221	今古奇談翁草 1-5	
2222-2227	古今奇談繁野話 1-6	
2228-2237	小夜嵐物語 1-10	
2238-2241	遠山奇談 1-4	
2242-2245	遠山奇談 後編1-4	
2246-2250	臥遊奇談 1-5	巻1の絵の人物にひげなどが描かれている。八雲によるものとは考えにくい。巻4にはルビが振ってあるところがある(他よりやや濃く見えるが、他と同じように元々の可能性あり)。
2251-2260	木耳雜記 1-10	
2261	宿直草 1冊5巻	
2262-2265	世事百談 1-4	
2266	諸国怪談実記 5	
2267	怪談諸国物語 1冊5巻	
2268-2270	化鏡丑満鐘 上・下	
2271-2275	新累解脱物語 1-5	
2276-2277	富士の人穴物語 上・下	
2278	御伽厚化粧 1冊5巻	
2279-2283	当日奇観 1-5 (席上奇観垣根草)	絵の人物にひげが描かれている。墨で漢字が書かれている。
2284	怪異前席夜話 1-5 (合本)	
2285	百物語	

2286	新撰百物語 5冊 (合本)	絵に色が塗ってある。文章や文字および印の書き込みがある。
2287-2291	百物語評判 1-5	草書による文章の書き込みが見られる。
2292	怪化百物語	印や線の書き込みが見られる(汚れかもしれない)。
2293-2296	近代百物語 1、3-5	
2297	太平百物語 前編 全 (5巻)	絵の書き込みが見られる。
2298-2300	狂歌百物語 上編・下編	狂歌の頭に・や○などの書き込みあり。
2301	怪物与論 5冊 (合本)	巻四に余白部分や絵にくずした字の書き込みあり。
2302-2304	古今妖魅考 1-3	第1巻の表紙裏に2個の○の書き込みあり。文中の歌に・の印あり(汚れかもしれない)。
2305-2306	白石先生鬼神論 上冊・下冊	
2307-2308	夜窓鬼談 上巻・下巻	奥付に漢数字やカタカナの書き込みあり。
2309-2313	列仙全伝 1-5	
2314-2318	近世畸人伝 1-5	
2319-2323	続近世畸人伝 1-5	
2324-2335	日本百将伝一夕話 1-12	1のはじめにサインあり。筆記体で「To my dear Mr. L. Hearn…」と読める。
2336-2340	巖流敵討絵本二島英雄記 1-5 (5冊 5巻 全10巻中)	
2341	朝鮮人大行列記 全	
2342	琉球人大行列記 全	
2343-2352	沙石集 1之巻・10之巻	2之巻の6、16ページに付箋あり。
2353-2357	新沙石集 1-5	
2358	王心抄	見返しに書き込みあり。また、赤で校正したあとがある。
2359-2372	正法念處經 第1冊・第14冊	赤で点(・)や傍線、Lあり。
2373	諸陀羅尼	文字を赤で訂正している。
2374-2377	各宗必携仏学三書 元、利、貞、亨	
2378-2380	往生要集 上・下	
2381-2386	三歳因縁弁疑 前編上・下 後編上・下	後編上の見返し、7、21ページに書き込みあり。 後編中の15ページに書き込みあり。
2387	盆供施餓鬼問弁 全	
2388-2389	孝子善之丞感得伝	38、39、42、43、45～47ページに赤で書き込みあり。
2390	親鸞上人御一代記図絵	
2391-2396	善悪因果経和談図絵 1-6	
2397-2402	金比羅参詣名所図絵 1-6	
2403	大道問答 全一冊	

2404	神話	
2405	神風記	
2406	出雲大社宮沿革図弁	
2407-2409	梅花心易掌中指南 上・下	
2410	蛍の話	
2411	英雄論	遊び紙にサインあり。筆記体で「Respectfully presented Mr. Y. Koizumi by His pupil, R. …」と読める。
2412-2413	歌舞音楽略史 乾、坤	
2414-2419	声曲類纂 増補 宮上、宮下、商、角、徵、洞	
2420-2421	万物紀元古事大全 上・下	
2422-2424	日本大玉篇 上巻・下巻	
2425-2430	群書一覽 1-6	
2431-2433	通俗仏教百科全書 上巻・下巻	上巻の扉の左下に128、中巻と下巻の目次のはじめのページの左下にそれぞれ129、130と書き込んである。
2434	郡名異同一覧	
2435	浮世絵展覧会目録	

※書架番号および書名は『ヘルン文庫目録』によった。

※書き込み内容が空欄のものは書き込み等が見られなかったものである。